

燈明之卷

泉鏡花作

—

「やあ、やまかゞしや蝮まむしが居をるぞう、あつけえやつだ、氣きをつけさつせえ。」

「えゝ。」

何なんと、足許あしもとの草くさへ鎌首かまくびが出でたやうに、立たちすくみになつたのは、薩摩さつま緋まがすりの單衣ひとへ、藍鼠あぬねずみむぢ無地の紹ろの羽織はおりで、身みが輕がるに出立いでたつた、都會とくわいからゝしい、旅たびの客きやく。——

近頃ちかごろは、東京とうきやうでも地方ちほうでも、まだ時季じきが早はやいのに、慌あわてもののせみか、それとも値段ねだんが安やすいたためか、道だう中ちゆうの晴はれの麥稈帽むぎわらぼう。これが眞新まあたしいので、雜ざつと、年としよりは少わかく見みえる、そのかはり何處どことなく人體にんていに貫目くわんめのないのが、吃驚びつくりした息いきもつかず、聲こゑを繼ついで、

「驚おどいたなあ、蝮まむしは弱よわつたなあ。」

と帽子ぼうしの鐙つばを——薄曇うすくもりで、空そらは一面いちめんに陰氣いんきなかはりに、まぶしくない——仰向あをむけに崖がけの上うへ

を仰いで、いま野良聲を放つた、崖縁にのそりと突立つ、七十餘りの爺さんを視ながら、蝮は弱つたな、と弱つた。が、實は蛇ばかりか、蜥蜴でも百足でも、怯えさうな、据らない腰つきで、

「大變だ、による／＼居るかい。」

「はあ、あアに、そんなでもねえがなし、ちよく／＼、鎌首をつん出すでい、氣をつけさつせるがよかんべでの。」

「お爺さん、おい、お爺さん。」

「あんだなし。」

と、谷へ返答だまを打込みながら、鼻から煙を吹上げる。

「煙草錢ぐらゐ心得るよ、煙草錢を。だから此處まで下りて来て、草生の中を連戻してくれないか。」

また此の荒墓・・・」

と云ひかけて、

「其の何だ・・・上の寺の人だと、悪いんだが、まつたく、これは荒れて居るね。卵塔場へ、深

入りはしないからよかつたけれど、今のを聞いては、  
足がすくんで動かないよ。」

「はゝはゝは。」

鼻のさきに漂ふ煙が、其の頸窪のあたりに、古寺  
の破廂を、なめくぢのやうに這つた。

「弱え人だあ。」

「頼むよー 此方は名僧でも何でも無いが、  
爺さん、爺さんを……導きの山の神と思ふか  
ら。」

「はて、勿體もねえ、飛だことを言ふなつす。」  
と兩つ提のー ー もう此の頃では、山の爺が喫  
む煙草がバツトで差支へないのだけれど、事實を報  
道するー ー 根附の處を、獨鈷のやうに振りなが  
ら、煙管を手弄りつゝ、ぶらりと降りたが、股引の  
足拵へだし、腰達者に、づか／＼……と、も  
う寄つた。

「いや、御苦勞。」

と一基の石塔の前に立並んだ、兩方、膝の隠れる  
ほど草深い。

實際、此の卵塔場は荒れて居た。三方崩れかゝつた窪地の、何處が境といふほどの杭一つあるのでなく、折朽ちた古卒都婆は、黍穀同然に雜伏して、薄暗いと白骨に紛れよう。石碑も、石塔も、倒れたり、のめつたり、臺に据つて居るのは殆どない。それさへ十ウの八つ九つまでは、殆ど草がくれなる上に、積つた落葉に埋れて居る。青芒の茂つた、葉越しの谷底の一方が、水田に開けて、遙々と連る山が、都に遠い雲の形で、蒼空に、離れ島かと流れて居る。

割合に土が乾いて居ればこそで　　昨日は雨  
だつたし　　ー　　もし濕地だつたら、蝮、やまかゞ  
しの警告がないまでも、うっかり一歩も入れなかつ  
たであらう。

それでもこれだけ分入るのさへ、樹の枝にも、卒  
都婆にも、苔の露は深かつた。　　．．．．．旅客の指  
の尖は草の汁に青く染まつて居る。　　雜樹の影が沁む

のかも知れない。

蝙蝠が居さうな鼻の穴に、煙は残つて、火皿に白くなつた吸殻を、ふつ／＼と、爺は掌の皺に吹落し、眉をしかめて、念のために、火の氣のないのを目でためて、吹落すと、葉末にかゝつて、ぽす／＼と消える處を、もう一つ破草履で、ぐいと踏んで、

「ようござらつせえました、御參詣でがすかな。」

「さあ・・・。」

と、妙な返事をする。

「南無、南無、何かね、お前様、此のお墓に所縁の方でがんすかなす。」

胡桃の根附を、紺小倉のくたびれた帯へ挟んで、踞んで掌を合せたので、旅客も引入られたやうに、夏帽を取つて立直つた。

「所縁にも、無縁にも、お爺さん、少し墓らしい形に見えるのは、近間では、これ一つぢやあないかー、それに、近い頃、參詣があつたと見える、此の線香の包紙のほぐれて残つたのを、草の中に覗いたものは、一つ家の灯のやうに、誰だつて、これ

を見當に辿りつくだらうと思ふよ。山路に行暮れたも同然ぢやないか。」

碑の面の戒名は、信士とも信女とも、苔に埋れて見えないが、三つ蔦の紋所が、其の葉の落ちたやうに寂しく顯はれて、線香の消残つた臺石に――  
田澤氏　――と仄に讀まれた。

「は、は、修行者のやうに言はつしやる、御遠方からでがんですかの、東京からなす。」

「いや、今朝は松島から。」  
と袖を組んで、さみしく言つた。

「御風流でがんです、お楽しみでや。」

「いや、飛でもない……波は荒れるし。」

「おう。」

「雨は降るし。」

「ほう。」

「漸と、お天氣になつたのが、仙臺から此方でね、いや、馬鹿々々しく、眠つて來た途中ですよ。」

成程、馬鹿々々しい・・・旅客は、小縣、凡杯  
――と自稱する俳人である。

此の篇の作者は、別懇の間柄だから、かけかまひのない處を言はう。食ひ續きは、細々ながら何うにかして居る。然るべき學校は出たのださうだが、或會社の低い處を勤めて居て、俳句は好きばかり、寧ろ遊戯だ。處で、はじめは、凡俳、と名のつたが、俳句を遊戯に扱ふと、近來は誰も附合はない。第一なぐられかねない。見ずや、きみ、やかなの鋭き匕首を以て、骨を削り、肉を裂いて、人性の機微を剔き、十七文字で、大自然の深奥を衝かうといふ意氣込の、先輩ならびに友人に對して濟まぬ。憚り多い處から、「俳」を「杯」に改めた。が、一盞獻ずるほどの、餘裕も働きもないから、手酌で濟ます、凡杯である。

それにしても、今時、奥の細道のあとを辿つて、松島見物は、「凡」過ぎる。近ごろは、獨逸、フランス、佛蘭西はつい隣りで、マルセイユ、ハンブルク、アビシニヤ如きは津々浦々の中に數へられさうな勢。

少し變つた處といへば、獅子狩だの、虎狩だの、類人猿の色のもめ事などが殆ど毎月の雑誌に表はれる……其の皆がみんな朝夷島めぐりや、おそれ山の地獄話もないらしい。

最近も、私を、作者を訪ねて見えた、學校を出たばかりの若い人が、一月ばかり、つい御不沙汰、と手軽い處が、南洋の島々を渡つて來た。……パイ、チョコ、キイ、キコと鳴く、青い鳥だの、黄色な鳥だの、可愛らしい話もあつた。が、聞く内にハツと思つたのは、或親島から枝島へ、カヌウで渡つた時、白熱の日の光に、藍の透過る、澄んで靜かな波のひと處、忽ち濃い萌黄に色が變つた。微風も一穢雲もないのに、ゆら／＼と其の潮が動くと、水面に近く、颯と黄薔薇のあふりを打つた。其の大きさ、大洋の只中に計り知れぬが、巨大なるの浮いたので、近々と嘲けるやうな黄色な目、二丈にも餘る青い口で、ニヤリとしてやがて沈んだ。海の魔宮の侍女であらう。其の消えた後も、人の目の幻に、船の帆は少時其の萌黄の油を塗つた。……「疊

で言ひますと」——話し手の若い人は見まはし



たが、作者の住居には生憎八畳以上の座敷がない。

「さうですね、三十畳、いやもつと五十畳、或はそれ以上かも知れな

かつたのです。」と言ふのである。

半日隙とも言ひたいほどの、旅の手軽さが此のくらみである處を、雨に降られた松島見物を、山の爺に話して居る、凡杯の談話如きを――讀者諸賢――しかし、しばらく之を聴け。

小縣凡杯は、はじめて旅をした松島で、着いた晩と、あくる日を降籠められた。景色は雨に埋もれて、竈にくべた生薪のいぶつたやうな心地がする。屋根の下の観光は、瑞巖寺の大將、しかも眇に睨まれたくらのもの、何のために奥州へ出向いたのか分らない。日も、懷中も、切詰めた都合があるから、三日めの朝、旅籠屋を出で立つと、途中から、からりとした上天氣。

奥羽線の松島へ戻る途中、あの筋には妙に豆腐屋が多い・・・と聞く。其の油揚げが陽炎を軒に立てて、豆腐のやうな白い雲が蒼空に舞つて居た。

をかしな思出は其ぐらゐで、白河近くなるにつれて、東京から來がけには、同じ處で夜がふけて、矢張りざんざ降だつた、雨の停車場の出はづれに、薄ぼやけた、うどんの行燈。雨脚も白く、眞盛りの卯の花が波を打つて、すぐの田畝が恰も湖のやうに榛がつて、の響が流れて居た。これあるがためか、と

思つたまで、雨の白河は懐しい。都をば霞とよもに出でしかど．．．一首を讀むのに、あの洒落もこの坊さんが、頭を天日に曝したといふのを思出す．．．「意氣な人だ。」とうつかり、あみ棚に預けた夏帽子の下で素頭を敲くと、小縣はひとりで浮かり笑つた。一寸驛へ下りて見たくなつたのださうである。

其處で、はじめて氣がついたと云ふのでは、まことに禮を失するに當る。が、ふと此の城下を離れた、片原といふのは、渠の祖先の墳墓の地である。

梅も山も、齊しく遠い。小縣凡杯は――北國の産で、父も母も其の處の土となつた。が、曾祖、祖父、祖母、尚ほ其の一族が、それか、あらぬか、あの雲、あの土の下に眠つた事を、昔話のやうに聞いて居た。

――家は、もと川越の藩士である。御存じ．．．と申出るほどの事もあるまい。石州濱田六萬四千石．．．船つきの湊を抱へて、内福

の聞こえのあつた松平某氏が、仔細あつて、こゝの  
片原五萬四千石、――遠僻の荒地に國がへとな  
つた。後に再び川越に轉封され、其のまゝ幕末に遭  
遇した、流轉の間に落ちこぼれた一藩の人々の遺骨、  
殘骸が、草に倒れて居るのである。

心ばかりの手向をしよう。

不了簡な、凡杯も、こゝで、本名の銚吉となると、  
妙に心が更まる。煤の面も洗はうし、土地の模様も  
聞かうし……で、驛前の旅館へ便つた。

「姉さん、風呂には及ばないが、顔が洗ひたい。

手水……何、洗面所を教へておくれ。それか  
ら、午飯を頼む。雑とでいゝ。」

二階座敷で、遅めの午飯を認める間に、様子を聞  
くと、めざす場所――片原は、五里半、かれこ  
れ六里遠い。

鐵道はある、が地方のだし、大分時間が費るらし  
い。

自動車じどうしゃの便べんはたやすく得えられて、然しかも、旅館りょくわんの隣となりが自動車屋じどうしゃやだと聞きいたから、價値ねだんを聞きくと、思おもひのほか廉れんであつた。

「早速さつそく一臺だいたの頼たのんでおくれ。．．．此この一ちよつと寸としたものだが、荷物にもつは預あづけて行ゆきたいと思おもふ。．．．成なるべく、日暮ひくれまでに歸かへつて、すぐ東京とうきやうへ立たちたいのだがね、時間じかんの都合つがふで遅おそくなつたら一晩ひとばん厄介やくかいになるとして――勘定かんぢやうは其その時ときと――自動じどうし車やは、あゝ、成程なるほど隣となりだ。では、世話せわなしだ、いや、お世話せわでした。」

表階子おもてはしこを下おりかけて

「ねえさん。」

「へい。」

「片原かたはらに、おつこち。．．．こいつ、棚たなから牡餅ぼたもちときこえるか。――戀人こひとでもあつたら言傳ことづけを頼たのまれようかね。」

「いやだ、知しりましねえよ、そんげなこと。」

「あゝ、自動車屋じどうしゃやさん、御苦勞ごくろうです。處ところで、料金れうきん

だが、間違まちがひはあるまいね。」

「はい。」

と恭しく帽を脱いだ、近頃は地方の方が夏帽になるのが早い。セルロイドの目金を掛けて居る。

「え、大割引で勉強をしとるです。で、其の、一寸豫め御諒解を得て置きたいのですが、お客様が小人數で、車臺が透いて居ります場合は、途中、田舎道、或は農家から、便宜上、其の同乗を求めらるゝ客人がありますと、御迷惑を願ふ事になつて居るのであります。」

「はゝあ、そんな事だらうと思つた。何うもお値段の鹽梅がね。」

女中も帳場も皆笑つた。

ロイドめがねを眞圓に、運轉手は生眞面目で、  
「多分の料金をお支拂ひの上、お客様がですな、一人で買切つておいでになりましたも、途中、その同乗を求むるものを斷つて謝絶いたしますと、獨占的ブルジョアの横暴でもありませんかのやうに、階級意識を刺戟しまして、土地が狭いもんですから、わね／＼をはじめ、お客様にも、敵意

を持たれますといふと、何かにつけて、不便宜、不利益であります處から。……は。」

「分りました、御尤です。」

「ですが、沿道は、全く人通りが少いのでして、乗合といつてもめつたにはありません。からして、お客様には、事實、御利益になつて居りますのでして。」

「いや、損をしても構ひません。妙齡の娘が、年増の別嬪だと、却つて此方から願ひたいよ。」

「……運轉手さん、此方はね、片原へ戀人に逢ひにいらつしやつたんださうですから。」

しつぺい返しに、女中にトンと背中を一つ、くらはされて、其のはずみに、ひよいと乗つた。元來おもみのある客ではない。

「へい御機嫌よう……お早く、お歸りに何うぞ。」

番頭の愛想を聞流しに乗つて出た。

惜いかな、阿武隈川の川筋は通らなかつた。が、  
縣道へ掛つて、しばらくすると、道の左右は、一様に青葉して、梢が深く、枝が茂つた。一里ゆき、二里ゆき、三里ゆき、思ひのほか、田畑も見えず、殆ど森林地帯を馳る・・・

座席の青いのに、濃い緑が色を合はせて、日の光は、ちら／＼と銀の蝶の形して、影も翼も薄青い。

人、馬、時々飛々に數へるほどで、自動車の音は高く立ちながら、鳴く音はもとより、ともすると、驚いて飛ぶ鳥の羽音が聞こえた。

一二軒、また二三軒。山吹、さつきが、淡い紅に、薄い黄に、其の背戸、垣根に咲くのが、森の中の夜があけかゝるやうに目に映ると、同時に、其處に言合せた如く、人影が顯はれて、門に立ち、籬に立つ。

村人よ、里人よ。其の姿の、轍の陰にかくれるの



が、なごり惜いほど、道は次第に寂しい。

宿に外套を預けて来たのが、不用意だつたと思ふばかり、小縣は、幾度も襟を引合はせ、引合はせし  
たさうである。

この森の中を行くやうな道は、起伏凹凸が少く、  
平だつた。がしかし、自動車の波動の自然に起るの  
が、波に揺らるゝやうで便りない。埃も起たず、雨  
のあとの樹立の下は、勿論濡色が遙に通つて居た。  
だから、偶に行逢ふ人も、其村の家も、唯漂々蕩々  
として陰氣な波に揺られて、あとへ、あとへ、漂つ  
て消えて行くから、峠の上下、並木の往來で、ゆき  
迎へ、又立顧みる、旅人同士とは品かはつて、世を  
かへても再び相逢ふすべのないやうな心細さが身に  
沁みたのであつた。

かあ、かあ、かあ、かあ  
鈍くて、濁つて、うら悲しく、明るいやうで、も  
の陰氣で。

「鳥がなくなあ。」

「群れて居るです。」

運轉手は何を思つたか、口笛を高く吹いて、  
「首くゞりでもなけりやいゝが、道端の枝  
に……いやだな。」

うつかり緩めた把手に、衝と動きを掛けた時である。ものゝ二三町は瞬く間だ。恰も其の距離の前途の右側に、眞赤な人のなりがふら／＼と立揚つた。天象、地氣、草木、此の時に當つて、人事に屬する、赤いものと言へば、讀者は直ちに田舎娘の姨見舞か、酌婦の道行振を瞳に描かるゝであらう。否、否、然うでない。

其處に、就中巨大なる杉の根に、揃つて、踞つて居て、いま一度に立揚つたのであるが、ちらりと見た時は、下草をぬいて燃ゆる躑躅であらう——  
また人家がある、と可懐しかつた。

自動車が八々と留まつて、窓を赤く蔽ふまで、むく／＼と人數が立ちはだかつた時も、齊しく、躑躅の根から湧上つたものゝやうに思はれた。五人——  
其の四人は少年である……とし十二三ばかり

り。皆眞赤なランニング褌衣で、赤い運動帽子を被つて居る。彼等を率ゐた頭目らしいのは、獨り、年配五十にも餘るであらう。脊の高い瘡男の、おなじ毛絲の赤褌衣を着込んだのが、緋の法衣らしい、坊主袖の、ぶわ／＼するのを上に絡つて、脛を赤色の巻きゲエトル。赤革の靴を穿き、剩へ、リボンでも飾つた状に赤木綿の蔽を掛け、赤い切で、みしと包んだヘルメツト帽を目深に被つた。

頤骨が尖り、頬がこけ、無性鬚がざら／＼と疎く黄味を帯び、その蒼黒い面色の、鈎鼻が尖つて、ツンと隆く、小鼻ばかり光澤があつて蠟色に白。眦が釣り、目が鋭く、血の筋が走つて、其のヘルメツト帽の深い下には、すべての形容について、角が生えて居さうで不氣味に見えた。

この頭目、赤色の指導者が、無遠慮に自動車へ入らうとして、ぎろりと我が銚吉を視て、胸さきで、ぎしと骨張つた指を組んで合掌した・・・變だ。が、これが禮らしい。加ふるに慇懃なる會釋だらう。けれども、此の恭屈頂禮をされた方は――又勿

論ろんされるわけもないが、――胸むねを引ひ掻かいて、腸はらわたでもむし雀むしるのに、引いん導だうを渡わたされでもしたやうで、腹はらへ風かぜが徹とほつて、ぞつとした。

すなは、即すなはち、手てを擧あげるでもなし、聲こゑを掛かけるでもなし、運うん轉てん手しゆに向むかつても亦また合がつ掌しやうした。其そこ處こで車くるまを留とめたが、勿もちろん論ろん、拜をがむ癖くせに倣がう然ぜんたる態たい度どであつたといふ。それもあとで聞きいたので、小をが縣たがぞつとするまで、不ふ思し議ぎに不ふ快わいを感じかんじたのも、赤あかい闖ちん入にふ者しやが、再ふたび合がつ掌しやうして席せきへ着つき、近ちか々／＼と顔かほを合あはせてからの事ことであつた。樹きから湧わかうが、葉はから降ふらうが、四よ人にんの赤あかい子こ供どもを連つれた、其その意い匠しやう、右みぎの趣しゆ向かうの、ちんどん屋や・・・と奥おく筋すぢでも稱とふるか何どうかは知しらない、一いっ種しゆ廣くわう告こく隊たいの、林りん道だうを穿うがつて、赤あか五ご點てん、赤あか長ちやう短たん、赤あか大小だいせう、點てん々／＼として顯あらはれたものであらう、と思おもつたと言いふのである。

が、すぐ其その間ま違ちがひが分わかつた。客きやくと、銃せん吉きちとの間あひだへ入はいつて腰こしを掛かけた、中なかでも、脊せのひよろりと高たかい、色いろの白しろい美び童どうだが、疝かんの蟲むしの所せ爲ゐであらう、・・・  
・・・優やさしい眉まゆと、細ほそい目めの、ぴり／＼と昆こん蟲ちゆうの觸しよく角かく

の如く絶えず動くのが、何の級に屬するか分らない、折つて疊んだ、獵銃の赤なめしの袋に包んだのを肩に斜に掛けて居る。且つこれは、乗込まうとする車の外で、ほかの少年の手から受取つて持替へたものであつた。而して、栗鼠が（註、此の篇の談者、小縣凡杯は、兎のやうに、と言つたのであるが、兎は私が贖戻だから、栗鼠にして置く。）後脚で飛ぶ如く、嬉しさうに、匆ねつゝ飛込んで、腰を掛けても、その、ぴよん、が留まないので居た。

後に、四童、一老が、自動車を辭し去つた時は、ずんぐりとして、それは熊のやうに、色の眞黒な子供が、手がはりに銃を受取ると齊しく、むく／＼、もこ／＼と、踊躍して降りたのを思ふと、一具の銃は、一行の名譽と、衿飾の、旗表あつたらしい。

獵期は過ぎて居る。まさか、子供を使つて、洋刀や空氣銃の宣傳をするのではあるまい。

いづれ仔細があるであらう。

ロイドめがねの黒い柄を、耳の尖に、？のやうに、

振りむいて運轉手が、

「どちらですか。」

「え、處で降りるんぢや。」

と威壓する如くに答へながら、雙手を擧げて子供等を制した。栗鼠ばかりでない。あと三個も、補助席二脚へ揉合つて乗ると齊しく、肩を組む、頬を合はせる、耳を引張る、眞赤な洲濱形に、鳥打帽を押合つて騒いで居たから。

戒は顯はれ、しつげは見えた。いま其の一弾指のもとに、子供等は、ひっそりとして、エンジンの音立處に高く響くあるのみ。其の静さは小縣唯一人の時よりも寂然とした。

何故か息苦しい。赤い客は咳一つしないのである。小縣は窓を開放つて、立續けて卷莨を吹かした。

しかし、硝子を飛び、風に捲いて、うしろ状に、緑林に靡く煙は、我が單衣の紺のかすりになつて散らずして、却つて一抹の赤氣を孕んで、異類異形に亂れたのである。

「きみ、きみ、まだなか／＼かい。」

「屋根が見えるでせう。――白壁が見えまし

た。」

「留まれ。」

その町の端頭と思ふ、林道の入口の右側の角に當る……人は棲まぬらしい、壊屋の横羽目に、乾草、粗朶が堆い。その上に、惜むべし杉の酒林の落ちて轉んだのが見える、傍がすぐ空地の、草の上へ、赤い子供の四人が出て、きちんと並ぶと、緋の法衣の脊高が、枯れた杉の木の揺ぐ如く、すく／＼と通るに従つて、一列に直つて、裏の山へ、夏草の徑を縫つて行く。――此の時だ。一番あとのずんぐり童子が、銃を荷つた嬉しさだらう、眞赤な大な臀を、むく／＼と振つて、肩で踊つて、

「わあい。」

と馬鹿調子のどら聲を放す。

ひよる長い美少年が、

「おうい。」

と途轍もない奇聲を揚げた。

同時に、うしろ向きの赤い袖が翻つて、頭目は掌を口に當てた、聲を壓へたのではない、笛を含んだらしい。ヒユウ、ヒユウと響くと、忽ち靜に、肅々として續いて行く。

すぐに、山の根に取着いた。が草深い雑木の根を、縦に貫く一列は、殿の尾の、ずんぐり、ぶつりとした大赤棟蛇が畛るやうで、あのヘルメットが鎌首によく似て居る。

見る間に、山腹の眞黒な一叢の竹藪を潜つて隠れた時、

「やーい。」

「おーい。」

ヒユウ、ヒユウと幽に聞こえた。何故か、其の笛に魅せられて、少年等が、別の世、別の都、別の町、あやしきかくれ里へ攫はれて行きさうで、惡酒に酔



つたやうに、凡杯の胸は塞つた。

自動車たるべきものが、スピードを何とした。

茫然とした状して、運轉手が、汚れた手袋の指の  
破れたのを凝と視て居る。――掌に、銀貨が五六  
枚、キラ／＼と光つたのであつた。

「――お爺さん、何だらうね。」

「私も、運轉手も、現に見たんだが。」

「さればなす……」

と、爺さんは、粉煙草を、三度ばかりに火皿の大  
きなのに撮み入れた。

……根太の抜けた、荒寺の庫裡に、爐の縁  
で。

西明寺 ー ー もと此の寺は、松平氏が舊領石州から奉搬の傳來で、土地の町村に檀家がない。従つて盆暮のつけ届け、早い話がおとむらひ一つない。如法の貧地で、堂も庫裡も荒れ放題。いづれ舊藩中ばかりの石碑だが、苔を剥かねば、紋も分らぬ。その墓地の圖面と、過去帳は、和尚が大切に居るが、生憎留守・・・・

墓參のよしを聽いて爺さんが言つたのである。

「ほか寺の佛事の手傳ひやら托鉢やらで、こちとら同様、細い煙を立てて居なさるでなす。」

生憎留守だが、そこは雲水、風の加減で、ふわりと歸る事もあらう。

「まあ一服さつせえまし、和尚様とは親類づきあひ、澁茶をいれて進ぜますで。」

とに角、いゝ人に逢つた。爺さんは、舊藩士でもあんなさるかと聞くと、

「孫八とこいて、いやはや、若い時から、やくざでがしての。縁は異なるもの、はッはッはッ。お前様、曾祖父様や、祖父様の背戸畑で、落穂を拾つた事もあんべい。――鼠棚搜いて麥こがしでも進ぜますだ。」

ともなはれて庫裡に居る――奥州片原の土地の名も、此の荒寺では、鼠棚がふさはしい。いたづらものが勝手に出入りをしさうな蟲くひ棚の上に、さつきから古木魚が一つあつた。音も、形も馴染のものだが、佛具だから、俗家の小懸は幼いいたづら時にもまだ持つて見たことがない。手頃なの大抵想像は付くけれども、かこみ殆ど二尺これだけの大きさとど、どのくらゐ重量があらうか。普通は、本堂に、香華の花と、香の匂と明滅する處に、章魚胡坐で構へてゐて、おどかして言へば、海坊主の坐禪の如し……辻の地藏尊の涎掛をはぎ合はせたやうな蒲團が敷いてある。ところを、大木魚の下に、ヒヤリと目に涼しい、薄色の、一目見て紛ふ方なき

女持ちの提紙入で。白い桔梗と、水紅色の常夏、と思つたのが、その二色の、花の鐵線かづらを刺繡した、銀座むきの至極當世な持もので、花はきりゝとして居るが、葉も蔓も弱々しく、中のもも角ばらず、なよ／＼と、木魚の下すべりに、優しい女の、帶の端を引伏せられたやうに見えるのであつた。

はじめ小縣が、こゝの崖を、墓地へ下りる以前に、寺の庫裡を覗いた時、人氣も、火の氣もない、爐の傍に一段高く破れ落ちた壁の穴の前に、この帶らしいものを見つけて、うつくしい女の、其の腰は、袖は、あらはな白い肩は、壁外に逆になつて、蜘蛛の巣がらみに、蒼白くくゝられてでも居さうに思つた。

瞬間の幻視である。手提はすぐ分つた。が、この荒寺、思ひのほか、陰寂な無人の僻地で――頼まう――を我が耳で聞返したほどであつたから。

私の隣の松さんは、熊野へ參ると、髪結うて、熊野の道で日が暮れて、

あと見りや怖しい、先見りやこはい

先の河原で宿取るか、跡の河原で宿取るか

さきの河原で宿取つて、鯰が出て、押へて、

手で取りや可愛いし、足で取りや可愛いし、

杓子ですくうて、線香で擔つて、燈心で括つ

て、

佛様のうしろで、一切食や、うまし、二切食

や、うまし

紀州の毬唄で、隱微な殘虐の暗示がある。む

かし熊野詣の山道に行暮れて、古寺に宿を借りた、

若い娘が燈心で括つて線香で擔つて、鯰を食べたの

ではない。鯰の方が若い娘を、……あとは言

はずとも可からう。例證は、遠く今昔物語、詣島部

寺女の語にある、と小縣は豫て聞いて居た。

紀州を尋ねるまでもなからう。

……今年ばじめて花見に出たら、寺の和尚に  
抱きとめられて、

高い縁から突落されて、笄落し、小枕落し

古寺の光景は、異様な衝動で渠を打つた。

普通、草双紙なり、讀本なり、現代一種の傳奇に於ても、かゝる場合には、たま／＼來つて、騎士が彼の女を救ふべきである。が、こしらへものより毬唄の方が、現實を曝露して、――女は速に虐げられて居るらしい。

同時に、愛惜の念に堪へない。ものあはれな女が、一切食はれ一切食はれ、木魚に壓へ挫がれた、・・・其の手提に見入つて居たが、腹のすいた狼のやうに庫裡へ首を突込んで居て可いものか。何となく、心ゆかしに持つて居た折靴を、縁側ずれに爐の方へ押入れた。それから、卵塔の草を分けたのであつた。――一つは、靴を提げて墓詣をするのは、事務を扱ふやうで氣がさしたからであつた。

今もある。・・・木魚の下に、其のまゝの涼しい夏草と、ちよろはげの靴とを見較べながら、

「―― 又その何ですよ。……待つて居られては氣忙しいから、歸りは歸りとして、自然、それまでに他の客がなかつたらお世話にならう。

「―― どうせ隙だから何時までも待たうと言ふのを―― 然ういつてね、一旦運轉手に分れた――

此方の町盡頭の、茶店……酒場か。……  
・ 雑とまあ、饅頭屋だ。それから、見た目にも道わるで、無理に自動車を通した處で、歩行くより難儀らしいから下りたんですがね―― 饅頭場の女給も、女房さんらしいのも―― その赤い一行は、さあ、何だか分らない、と言ふ。しかし、お小姓に、太刀のやうに鐵砲を持たして居れば、大將様だ。大方、魔ものか、變化にでも挨拶に行くのだから、と言ふんです。

魔ものだの、變化だのに、挨拶は變だ、と思つたが、あとで氣がつくと、女連は、うはさのある怪しいことに、恐しく怯えて居て、陰でも、退治の、生捉るのは言ひ憚つたものらしい。がまあ、此の邊にそんなものが居るのかね。……運轉手は笑つて居たが、私は眞面目さ。何でも、此の山奥に

おほぬま  
大沼といふのがある？・・・ありますか、お爺  
さん。」

「あるだ。」  
その時、此の氣輕さうな爺さんが、重たく點頭し  
た。

「・・・阿武隈川が近いによつて、阿武沼と、  
勿體つけるで、國々で名高い、湖や、瀉ほど、大い  
なものではねえだがなす、むかしから、それを逢魔  
沼と云ふほどでの、樹木が森々として凄いでや、め  
つたに人が行がねえもんだで、山奥々々といふだが  
ね。」

と額を暗く俯向いた。が、煙管を落して、門――  
いや、門も何もない、前通りの草の徑を、向うの  
原越しに、差覗くが如く、指をさし、  
「あの山を一つ背後へ越した處だで、澤山遠い處  
ではねえが。」  
と言ふ。

其の向う山の頂に、杉檜の森に包まれた、堂、杜



らしい一地がある。

「……途中で、気が着いたが。」

水の影でも映りさうに、其の空なる樹の間は水色に澄んで青い。

「沼は、あの奥に當るのかね。」

「えへい、まあ、其の邊の見當づら。」

と、掌をもじや／＼と振るのが、枯葉が亂れて、其頂の森を搔亂すやうに見え、

「何かね、其の赤い化もの……」

「赤いのが化けものぢやあない——お爺さ

ん。」

「はあ、然うけえ。」

と妙に氣の抜けた返事をする。

「……だから、私が——ぢやあ、其の

阿武沼、逢魔沼か。其處へ、あの連中は行つたんだ

らうか、沼には變つた……何か、可恐い、可

怪い事でもあるのかね。餛飩酒場の女房が、いゝえ、

沼には牛鬼が居るとも、大蛇が出るとも、そんな風説は近頃では聞きませんが、いやな事は、此のさきの街道——躰の中にあつた、といふんだよ。寺の前を通る道は、古い水戸街道なんださうだね。」

「はあ、然うでなす。」

「ぬかるみを目の前にして……さあ、出掛けよう。で、こゝへ私が来る道だ。何が出ようと此の眞晝間、氣にはしないが、もの好きに、どんな可恐い事があつたと聞くと、女給と顔を見合はせ、てね、旦那、殿方には何でもないよ。アハ……と笑つて、陽氣に怯かす……其の、其の邊を女が通ると、ひとりでに押孕む……」

「馬鹿あこけ、あいつ等。」

と額にびく／＼と皺を刻み、瘦腕を突張つて、爺は、彫刻のやうに堅くなつたが、

「あツはツはツ。」

唐突に笑出した。

「あツはツはツ。」

忽ち口くちにふたをして、

「こゝは噴出ふきだす處ところでねえ。麥むぎこがしが消飛けしとぶでや、

お前まへ様もやらつせえ、和尚しやうさま様の鹽しほ加減かげんが出来できとる

で。」

缺茶碗かけぢやわんにもりつけた麥むぎこがしを、しきりに前刻さつきから、たばせた。が、匙さしは附木つけぎの燃もえさしである。

「えゝ鹽梅あんばいだ。さあ、やらつせえ、さ。」

搔かい候こうへ、と言いふのである。これを思おもふと、木曾きそ殿どのの、搔食かいくらはせた無鹽ぶえんの平茸ひらたけは、碧澗へきかんの羹あつものであらう。が、爺ぢいさんの竈禿くどはげの針白髪はりしらは、阿倍あへの遺臣ゐしんの概がいがあった。

「お前まへ様の前まへだがの、女をんなが通とほると、ひとりで孕はらむなど、うそにも女をんなの身みになつたらどうだんべいなす、聞きかねえ分ぶんで居ゐさつせえまし。優やさしげな、情合じやうあひの深ふかい、旦那だんな、お前まへ様だ。」

「いや、恥はづかしい、情じやうがあるの、何なんのと言いつて。」

墓詣りは、誰でもする。」

「いや、そればかりではねえ。——知つとるだ。」

お前様は人間扱ひに、畜類にものを言はしつたる。」

「畜類に。」

「おゝ、鷺によ。」

「鷺に。」

「白鷺に。暇さ來る途中でよ。」

「あゝ、知つてるのかい、それは何うも。」

四

―― きみ、きみ ー

白鷺しらさぎに向つて聲こゑを掛かけた。

「人ひとに聞きかれたのでは極きまりが悪わるいね・・・」

西明寺さいみやうじを志しして來くる途とちゆう中ちゆう、一處ひとところ、道端みちばたの低ひくい畝あせに、  
一叢ひとむらの緋牡丹ひぼたんが、薄曇うすくもる日ひに燃もゆるが如ごとく、二輪にりん咲さ  
いて、枝えだの蒼つぼみの、撓たわなのを見みた。 ー 奥路おくぢに名な  
高かい、例れいの須賀川すががはの牡丹園ぼたんえんの花はなの香かが風かぜに傳つたはる所せ  
爲あかもし知しれない、汽車きしやから視ながめる、目めの下したに近ちかい、  
門かど、背戸せと、垣根かきね。遠とほくは山裾やますそにかくれてた茅屋かややにも、  
咲昇さきのぼる葵あひひを凌しのいで牡丹ぼたんを高たかく見みたのであつた。が、  
こんなになこゝろに心易こゝろやすい處ところに咲さいたのには逢あはなかつた。ま  
た何處どこにもあるまい。細竹ほそだけ一節ひとふしの圍かこひもない、醉よへる  
艶婦えんぶの裸身らしんである。

旅たびの袖そでを、直たゞちに蝶てふの翼つばさに開ひらいて ー 狐きつねが憑つ  
いたと人ひとさへ見みなければ ー 尤もつとも四邊あたりに人影ひとかげも  
なかつたが ー ふうわりと飛とんで、花はなを吸すはうと  
も、蒼つぼみを抱だかうとも、心こゝろのまゝに思おもはれた。それだ

のに、十歩・・・いや、もつと十間ばかり隔たつた處に、銚吉が立停まつたのは、花の荅を、蓑毛に被いだ、舞の烏帽子のやうに翳して、葉の裏すく水の影に、白鷺が一羽、婀娜に、すつきりと羽を休めて居たからである。

こゝに一筋の小川が流れる。三尺ばかり、細い水は清く澄み、瀬は立ちながら、悠揚として、さら／＼と聞くほどの音もしない。山人の水源は深く沈んだ池沼であらう。湖と言ひ、瀧と聞けば、未の流のかくまで静なことはあるまいと思ふ。たとひ地理にして如何なりとも。

―― 松島の道では、鼓草をつむ道草をも、溝を跨いで越えたと思ふ。こゝの水は、牡丹の叢のうしろを流れて、山の根に添つて荒れた麥畑の前を行き、一方は、角ぐむ蘆、茅の芽の漂ふ水田であつた。

道を挟んで、牡丹と相向ふ處に、亞鉛と柿の繼はぎなのが、ともに腐れ、屋根が落ち、柱の倒れた、以前掛茶屋か、中食であつたらしい伏屋の殘骸が、

蓬の裡にのめつて居た。或は、足休めの客の愛想に、道の對う側を花畑にして居たものかも知れない。流轉のあとと、榮花の夢、軒は枯骨の如く朽ちて、牡丹の膚は鮮紅である。

古蓑が案山子になれば、茶店の骸骨も花守をして居よう。煙は立たぬが、根太を埋めた夏草の露は乾かぬ。其の草の中を、恰も、ひらひら、と、ものゝ現のやうに、いま生れたらしい蜻蛉が、群青の絹絲に、薄淺葱の結び玉を目にして、綾の白銀の羅を翼に縫ひ、ひらひら、と流の方へ、葉うつりを低くして、牡丹に誘はれたやうに、道を傳つた。

またあまりに儂い。土に映る影もない。が、其の影でさへ、觸つたら、毒氣で忽ち落ちたらう。――  
暇道の真中に、別に、凄じい蟲が居た。

然も、此方を、銚吉の方を向いて、髯をぴち／＼と動かす。一疋七八分にして、軀は寸に足りない。けれど、羽に碧緑の艶濃く、赤と黄の斑を飾つて、腹に光のある蟲だから、留つた土が砥になつて、磨

いたやうに燦然とする。葛上亭長、莞青、地膽、三種はせた、猛毒、膚に粟すべき斑蝥の中の、最も普通な、みちをしへ、魔の憑いた寶石のやうに、  
■ 耀と招いて居た。

「—— 此方を襲つて来るのではない。其處は自然の配劑だね。人が進めば、ひよいと五六尺退つて、其處で、また、おいで／＼をして居るんだ。碧綠赤黄の色で誘ふのか知らん。」

蜻蛉では勿論ない。それを狙つて居るらしい、白鷺が、翼を開くまでもなかつた。牡丹の花の影を、きれいな水から、すつと出て、斑蝥の前へ行くと思ふと、約束通り、前途へ退つた。人間に對すると、其の舉動は同一らしい。……白鷺が再び、すつと進む。

あの歩の運びは、小股がきれて、意氣に見える。斑蝥は、又飛びしさつた。白鷺が道の中を。



ー きみ、 ー きみ ー  
「うっかり聲を出して呼んだんだよ、つい。・  
・ 毒蟲だ、大毒だ。きみ、嘔へてはいけないと。  
あの毒は大變です、その卵のくつついた野菜を食べ  
ると、血を吐いて即死ださうだ。  
現に、私がね、たゞ、觸られてかぶれたばかりだ  
が。

北國の秋の祭 ー 十月です。半ば頃、その祭  
に呼ばれて親類へ行つた。

白山宮の境内、大きな手水鉢のわきで、人ごみの  
中だつたが、山の方から、颯と蟲が来て頼へとまつ  
た。指のさきで拂ひ落したあとが、むず／＼と痒い  
んだね。

御手洗は清くて冷い、すぐ洗へばだつたけれども、  
神様の助けです。手も清め、口もそぐ。・  
あの手をいきなり突込んだらどのくらゐ人を損つた  
らう。 ー たとひ殺さないまでもと思ふと、今  
でも身の毛が立つほどだ。ほてつて、顔が二つにな

つたほど幅はばつたく重いおも。やあ、獅子ししのやうな面つらだ、鬼おにの面めんだ、と小兒こどもたちに囃はやされて、泣ないたり怒おこつたり。それでも遊あそびにほうけて居ゐると、清きよらかな、上品ひんな、お神巫みこかと思おもふ、色いろの白しろい、紅もみの袴はかまのお嬢ぢやうさんが、祭まつの露店ろてんに賣うつて居ゐる。山葡萄やまぶどうの、黒くろいほどな紫むすびなの實みを下くだすつて。―― お歸かへんなさい、水みづで冷ひやすのですよ。――

――で、驅戻かけもとると、さきの親類しんるゐでは吃驚びっくりして、頭あたまを冷ひやして寝ねかしたんだがね。客きやくが揃そろつて、おやぢ。私わたしの父ちちが來きたので、御馳走ごちそうの膳ぜんの並ならんだ隣となりへ出でて坐すわつた處ところ、其處そこらを視みて、しばらくして、内うちの小僧こそうは？。と聞きくんだね。袖そでの中なかの子こが分わからないほど、面つらが鬼おにになつて居ゐたんです。おやぢの顔色かほいろが變かはると、私わたしも泣な出した。あとをよくは覺おぼえて居ゐないんだが、其その山葡萄やまぶどうを雫しづくにして、塗ぬつたり吸すつたりして無事ぶじに治なほつた。―― 蟲むしは斑蝥ばんめうだつた事ことはいふまでもないのです。」

「何なんと、はあ、おつかねえもんだ、なす。知しらねえ蟲むしぢやねえですが、―― 尤もつとも、あの、み

ちをしへは、誰も觸らねえ事にしてあるにはあるだよ。」

「だから、つい、聲も掛けようではないか。」

「鷺の鳥は何うしただね。」

「お爺さん、それは見て居なかつたかい。」

「なまけもんだ、陽氣のよさに、あとはすぐとろ／＼だ。あの漬屋の陰に寝ころばつて居つたもんだでの。」

白鷺はやがて羽を開いた。飛ぶと、宙を翔る威力には、とび退る蟲が嘴に消えた。雪の蓑毛を爽に、もとの流の上に歸つたのは、あと口に水を含んだのであらうも知れない。諸羽を搏つと、ひらりと舞上る時、緋牡丹の花の影が、雪の頸に、ぽつと沁みて薄紅がさした。其のまゝ山の端を、高く森の梢にかくれたのであつた。

「あの様子では確かに呑んだよ、どうも殺られたらうと思ふがね。」

爺は股引の膝を居直つて、自信がありさうに言った。

「うんや、鳥は伶俐だで。」

「伶俐な鳥でも、殺生石には斃るぢやないか。」

「うんや、大丈夫ですがすべよ。」

「が、見る／＼あの白い咽喉の赤くなつたのが可  
恐いよ。」

「とろりと旨いと酔ふがなす。」

にた／＼と笑ひながら、

「麥こがしでは駄目だがなす。」

「しかし・・・」

「お前様、それにの、鷺はの、明神様のおつかは  
しめだよ、白鷺明神といふだでね。」

「あゝ、然うか、あの向うの山のお堂だね。」

「餘り人の行く處でねえでね。道も大儀だ。」

と、何故か中を隔てるやうに、さし覗く小縣の目  
の前で、頭を振つた。

明神の森といふと　　あの白鷺は其の梢へ飛  
んだ　　何故か爺が、まだ誰も詣でようと  
はぬものを、悪く遮りだてするらしいのに、反感を

持つとまでもなかつたけれども、すぐにも出掛けた  
い氣が起つた。黒塚の婆の納戸で、止むを得ない。

「―――時に、和尚さんは、まだなか／＼歸り  
さうに見えないね。とすると、位牌も過去帳も分ら  
ない。……」

「何しろ、此の荒寺だ、和尚は出勝だよつて、大  
切な物だけは、はい、町の在家の確かな藏に預けて  
あるで。」

「また歸途に寄るとしよう。」  
不意に立掛けた。が、見掛けた目にも、若い綺麗  
な人の持ものらしい提紙入に心を曳かれた。またそ  
れだけ、露骨に聞くのが擦つたかつたのを、こゝで  
銑吉が棄鞭を打つた。

「お爺さん、お寺には、おかみさん、いや、奥さ  
んか。」

小さな聲で、

「おだいこくがおいでかね。」

「は、飛でもねえ、それどころか、檀那がねえで、亡者も居ねえ。だがな、また此の和尚が世棄人過ぎた、あんまり悟りすぎた。参詣の女衆が、忘れたればとつて、預けたればとつて、あんだ、あれは。」

と、せきこんで、

「・・・外廻りをするにして、要心に事を缺いた、木魚を壓に置くとは何たるこんだ。」

と、やけに突立つ膝がしらに、麥こがしの椀を爐の中へ突込んで、ぱつと立つ白い粉に、クシンと咽せたは可笑いが、手向の水の涸れたやうで、見る目には、ものあはれ。

もくりと、搔落すやうに大木魚を膝に取つて、

「ぽつかり押孕んだ、然も大い、木魚講を見せつけられて、どんなにか、はい、女衆は恥かしかんべい。」

其の時、提紙入の色が、紫陽花の淺葱淡く、壁の暗さに、黒髪も亂れつゝ、産婦の顔の萎れたやうに見えたのである。

谷間の卵塔に、田澤氏の墓の唯一基苔の拂はれた、それを思へ。

「お爺さん、では、あの女の持ものは、お産で死んだ記念の納ものでもあるのかい。」

べそかくばかりに眉を寄せて、

「牡丹に立つた白鷺になるよりも、人間は娑婆が戀しかんべいに、産で死んで、姑獲鳥に成るわ。びしよびしよ降の闇暗に、若い女が青ざめて、腰の下さ血だらけで、あのこはれ屋の軒の上へ。……わあ、情ない。……お救ひ下され、南無普門品、第二十五。」

と爐縁をずり直つて、たとへば、小縣に股引の尻を見せ、向うむきに圓く踞つたが、古寺の狸などを論ずべき場合でない。ー およそ、其の背中ほどの木魚にしがみついて、もく、もく、もく、もくと立てつけに鳴らしながら、

「南無普門品第二十。」

「普門品第二十五。」

小縣も、ともに口の裡で。

「この寺に觀世音。」

「あゝ居らつしやるとも、難有い、ありがた

い………」

「その本堂に。」

「いや、あちらの棟だ――あゝ、參らつしや

るか。」

「參らうとも。」

「おゝ、いゝ事だ、さあ、ござい、ござい。」

と抱込んだ木魚を、もく、もくと敲きながら、足腰の頑丈づくりがひよこ／＼と前へ立つた。

此の爺さん、何うかして居る。

が、導かれて、御厨子の前へ進んでからは――  
然ういふ小縣が、却つて、何うかしないでは居られなくなつたのである。

此の庫裡と、わづかに二棟、隔ての戸もない本堂



は、置棚の眞中に、名號を掛けたばかりで、其の外  
の横縁に、それでも形ばかり階段が残った。以前は  
橋廊下で渡つたらしいが、床板の折れ挫げたのを繼  
合せに土に敷いてある。

明神の森が右の峰、左に、卵塔場を谷に見て、よ  
く一人で、と思ふばかり、前刻イんだ、田澤氏の墓  
は其の谷の草がくれ。

向うの階を、木魚が上る。あとへ續くと、須禰壇  
も佛具も何もない。白布を蔽うた臺に、經机を据ゑ  
て、其の上に黒塗の御厨子があつた。

庫裡の爐の周圍は筵である。こゝだけ疊を三疊ほ  
どに、賽銭の箱が小さく据つて、花瓶に雪を装つた  
一束の卵の花が露を含んで清々しい。根じめともな  
い、三本ほどのチユリツブも、蓮華の水を抽んでた  
風情があつた。

勿體ないが、其の卵の花の房々したのが、おのづ  
から押になつて、御厨子の片扉を支へたばかり、片

扉は、鎧の袖の斷れたやうに摺れ下つて居ただか  
ら。

「は、」

只伏拜むと、斜に差覗かせたまふお姿は、御丈八  
寸、雪なす卯の花に袖のひだが靡く。白木一彫、群  
青の御髪にして、一點の朱の唇、打微笑みつゝ、爺  
を、銚吉を、見そなはず。

「南無普門品第二十五。」

「失禮だけれど、准胝觀音で在らつしやるね。」

「はあい、然うでがすべ。和尚どのが、覺えにく  
い名を稱へさつしやる。南無普門品第二十五。」

よし、唯、南無とばかり稱へ申せ、こゝにおはす  
るは、除災、延命、求兒の誓願、擁護愛愍の菩薩で  
ある。

「お爺さん、あゝ、それに、生意氣をいふやうだ  
けれど、これは素晴らしい名作です。私は知らない  
が、友達に大分出来る彫刻家があるので、門前の小  
僧だ。少し分る・・・それに、よつほど時代が

古い。  
」

「和尚に聞かして下つせえ、どないにか喜びます  
べい、尤も前藩主が、石州からお守りしてござつた  
とは聞いとりますがの。」  
と及腰に覗いて居た。

お蠟燭を、といふと、爺が庫裡へ調達に急いだ  
「こゝで濫に火あつかひをさせない注意は尤  
もな事である」

「たしかに寶物。」  
「懾り多いが、靈容の、今度は、作を見ようとして、  
御厨子に寄せた目に、ふと卯の花の白い奥に、ものを  
忍ばすやうにして、供物をした、二つ折の懐紙を  
視た。備へたのはビスケットである。これは聊か稚  
氣を帯びた。が、にれぜん河のほとり、菩提樹の蔭  
に、釋尊にはじめて捧げたものは何であらう。菩薩  
の壇にビスケットも、或は臘八の粥に増らうも知れ  
ない。しかしこれを供へた白い手首は、野暮なレエ  
スから出たらしい。勿論だ。意氣なばかりが女でな

い。同時に芬と、媚かしい白粉の薫がした。

爺が居て気がつかなくつたか。木魚を置いたわきに、三寶が据つて、上に、こゝがもし閻魔堂だと、女人を解いた生血と臍肉に紛ふであらう、生々と、滑かな、紅白の巻いた絹。

「あゝ、誓願の其一、求兒——子育、子安の觀世音として、こゝに婦人の參詣がある。」

世に、参り合はせた時の順に、白は男、紅は女の子を授けらるゝ……と信仰する、觀世音のたまふ腹帯である。

其の三寶の端に、薄色の、折目の細い、女扇が、忘れたやうに載つて居た。

正面の格子も閉され、人は誰も居ない。……そつと取ると、骨が水晶のやうに手に冷りとした。

卯の花の影が、ちら／＼と砂子を散らして、繪も

模様も目には留まらぬさきに　ー　せい……せい、  
と書いた女文字。

今度は、覚えず暇が染まつた。

銚吉には、何を秘さう、おなじ名の戀人があつた  
のである。

作者は、小縣銚吉の話すまゝ、つい釣込まれて、  
 戀人――と受次いだ、大切な處だ。念のため  
 断るが、銚吉には、はやく女房がある。然り、女  
 房があつて資産がない。女房もちの錢なしが當世色  
 戀の出来ない事は、昔といへども實はあまりかはり  
 はない。

打あけて言へば、渠は唯自分勝手に、惚れて居る  
 ばかりなのである。

また、近頃の色戀は、銀座であらうが、淺草であ  
 らうが、山の手新宿のあたりであらうが、つゝしみ  
 が淺く、たしなみが薄くなり、次第に面の皮が厚く  
 なり、恥が少なくなつたから、惚れたといふのに憚る  
 ことだけは、先づ以てないらしい。

釣の道でも（岡）と稱がつくと輕んぜられる。  
 銚吉のも、然もその岡惚れである。其の癖、夥間で

評判である。

此の岡惚れの対象となつて、江戸育ちだといふから、海津か卵であらう、築地邊の川端で迷惑をするのがお誓さんで——實は梅水といふ牛屋の女中さん。……御新規お一人様、なまで御酒……待つた、待つた。そ、そんなのぢや決してない。第一、お客に、むらさきだの、鍋下だのと、符帳でものを食ふやうな、そんなのも決して無い。

梅水は、以前築地一流の本懐石、江戸前の料理人が庖丁を錆びさせない腕を研いて、吸ものゝ運びにも女中の裙さばきを睨んだ割烹。震災後も引續き、黒堀の奥深く、竹も樹も静まり返つて客を受けたが、近代の或世態では、篝火船の白魚より、舶來の鹽鱒が幅をする。正月飾りに、魚河岸に三個よりなかつたといふ二尺六寸の海老を、緋緘の鎧の如く、黒松の樽に緘した一騎駈の商賣では軍が危い。家の業が立ちにくい。がらりと氣を替へて、かうべ肉のすき焼、ばた焼、お望み次第に客を呼んで、抱一上人の

夕顔ゆふがほを石燈籠いしどうろうの灯ひでほの見みせる數寄屋すきやづくりも、七賢人けんじんの本床ほんどこに立つた、松林まつばやしの大廣間おひろまも、其そのまゝで、びんちやうの火ひを堆うづたかく、ひれの膏あぶらを煮にる。

この梅水ばいすゐのお誓せいは、内うちの子こ、娘分むすめぶんであるといふ。來たきのは十三で、震災しんさいの時ときは十四であつた。繰返くりかへしていふでもあるまい。――あの炎ほのほの中なかを、主人しゅじんの家うちを離はなれないで、勤め續つづけた。尤もつとも孤兒みなしこ同然どうぜんだとのこと、都みやこに然しかるべき身内みうちもない。その所爲せゐか、沈しづんだ陰氣いんきな質たちではないが、色いろの、抜ぬけるほど白しろいのに、何處どこか寂さびしい影かげが映うつる。膚はだをいへば、きめが細こまかく、實際じつさい、手首てくび、指ゆびの尖さきまで化粧けしやうをしたやうに滑なめらかに美しい。細面ほそおもてで、目めは、ぱつちりと、大おほきくないが強はりがあつて、そして眉まゆが優やさしい。緊しまつた口許くちもとが、莞爾にっこりする時とき一寸ちゆつとうけ口のやうになつて、其その清きよい唇くちびるの左ひだりへ輕かるく上あがるのが、笑顏ゑがほながら凜りんとする。總すべてが薄うすくなく、細ほそく、なよ／＼として居ゐるのである。緋ひも紅くれなゐも似に合あふものを、淺葱あさぎだの、白しろの手絡てがらだの、いつも淡泊あつさりした圓鬢まるまげで、年とし紀しは三十を一つ出でた。が、二十四五うへの上うへには見みえない。一度いちど五月ごごの節句せつぐに、催もよほしの



假装の時、水髪の藝子島田に、青い新藁で、五尺の  
菖蒲の裳を曳いた姿を見たものがある、と聞  
く。……貴殿はいゝ月日の下に生れたな、と  
言はねばならぬやうに思ふ。或は一度新橋からお酌  
で出たのが、都合で、梅水にかはつたともいふが、  
いまに於ては審でない。たゞ不思議なのは、然ばか  
りの容色で、其の年まで、いまだ浮氣、あらはに言  
へば、旦那があつたうはさを聞かぬ。ほかは知らな  
い、あのすなほな細い鼻と、口許がうそを言はぬ。  
——お誓さんは處女だらう……。――（しばら  
く）——これは小縣銑吉の言ふところである。

十六か七の時、唯一度——場所は築地だ、家  
は懷石、人も多いに、臺所から出入りの牛乳屋の小  
僧が附ぶみをした事のあるのを、最も古くから、お  
誓を鼻肩の年配者、あたまのきれいに兀げた粹人が  
知つて居る。梅水の主人夫婦も、座興のやうに話を  
する。ゆらの戸の歌ではなけれど、此の戀の行方は  
わからない。が、對手が牛乳屋の小僧だけに、天使と  
牧童のお伽話を聞く氣がする。たゞ其の玉章は、お  
誓の内證の針箱にいまも秘めてあるらしい。……

・  
・

「……一生の願に、見たいものですな。」

「お見せませうか。」

「恐らく不老長壽の薬になる——近頃はやる、

性の補強剤に効能の増ること萬々だらう。」

「然うでせうか。」

其の頬が、白く、涼しい。

「見せるよ。」

低い聾の澄んだ調子で、「ほゝゝ。」

と莞爾。

其の口許の左へ軽くしまるのを見るがいゝ。・

・座敷へ持出さないことは言ふまでもない。色

氣の有無が不可解である。或種のうつくしいものは、

神が惜んで人に與へない説がある。なるほど然うい

へば、一方圓満柔和な婦人に、菩薩相といふのがあ

る。續いて尼僧顔がないでもあるまい。それに對し

て、お誓の處女づくつて、血の清澄明晰な風情に、

何となく上等の神巫の麗女の面影が立つ。

「―― われ知らず、銚吉のかくれた意識に、おのづから、毒蟲の毒から救はれた、うつくしい神巫の影が映るのであらう。――

おゝ美はしのをとめよ、と賽錢に、二百金、現に三百金ほどを包んで、袖に呈するものさへある。が、お誓はいつも、其のまゝお帳場へ持つて下つて、おかみさんの前で、こんなもの。すぐ、おかみさんがつツと出て、お給仕料は、お極りだけ御勘定の中に頂いてありますから。……これでは、玉の手を握らう、紅の袴を引かうと、乗出し、泳上る信心の輩の頭を、幣結うた袖を以て、其のあしきを拂ふやうなものである。

況や、銚吉の如き、お月掛なみの氏子をや。

其の志を、あはれむ男が、いくらか思を通はせてやらうといふ氣で。……

「小縣の惚れ方は大變だよ。」

「嬉しいだらう。」

「えゝ。」

爾こり……  
目で、ツンと澄すまして、うけ口くちを一寸ちよつとしめで、莞にっ

「嬉しいですわ。」

しかも、銑せん吉きちが同座どうざで居あた。

餘計よけいな事ことだが――一説いっせつがある。お誓せいはうまれが東京とうきやうだといふのに「嬉しいですわ。」は、をかしい。此この言葉ことばづかひは、銀座ぎんざあるきの紳士しんし、學生がくせい、専らもつぱ映畫えいぐわの辨士べんしなどが、放わざと粹いきがつて「避暑ひしよに行いつたです。」「アルプスへ上のぼるです。」と使用しやうするが、元來くわんらいは訛なまりである。戀こはれて――いやな言葉ことばづかひだが――挨拶あいさつをするのに、「嬉しいですわ。」は、嬉うれしくない、と言いふのである。

紳士しんし、學生がくせい、敢あへて映畫えいぐわの辨士べんしとは限かぎらない。梅水ばいすゐの主人しゅじんは趣味しゆみが遍あまねく、客きやくが八方はつぱうに廣ひろいから、多た方面はうめんの藝術家げいじゆつか、畫家ぐわか、彫刻家てうこくか、醫い、文ぶん、法はふ、理り工こうの學士がくし、博士はかせ、俳優はいゆう、いづれの道みちにも、知名ちめいの人物じんぶつが少すくなない。揃そろつた事ことは、婦人科ふじんくわ、小兒科せうにか、齒科しくわもある。申まをしおくれました、作家さくか、劇作家げきさくかも勿論もちろんある。其處そこで、

此の面々が、年齢の老若にかゝはらず、東京ばかりではない。のみならず、故らに、江戸がるのを毛嫌ひして、「さすです。」「のむです。」「をやる名士が少くない。純情無垢な素質であるほど、つい其の訛がお誓にうつる。

浅草寺の天井の繪の天人が、蓮華の盥で、肌脱ぎの化粧をしながら、「こウ雲助どう、こんたア、けふ下界へでさつしやるなら、京橋の仙女香を、とつて来ておくんなんし、これサ乙女や、なによウふざけるのだ、きり／＼きやうでえをだしておかねえか。」「（註に、けはひ坂　ー　實は吉原　ー

近所だけか、をかしなことばが、うつつてゐたまふ、）と洒落れつゝ敬意を表した、著作の實例がある。遺憾ながら「嬉しいですわ。」とはかいてない。けれども、其の趣はわかると思ふ。またそれよりも、眞珠の首飾見たやうなものを、一寸、脇の下へずらして、乳首をかくした膚を、お望みの方は、文政壬辰新板、柳亭種彦作、歌川國貞畫　ー　奇妙頂禮地藏の道行　ー　を、ご一覽になるがい。

通り一遍の客ではなく、梅水の馴染で、昔からの  
鼻肩連が、六七十人、多い時は百人に餘る大一座で、  
すき焼で、心置かず隔てのない月並の會・・・  
といふと、俳人には禁句らしいが、其處等は凡杯で  
悟つて居るから、一向に頓着しない。先輩、また友  
達に誘はれた新參で・・・漸と一昨年の秋頃  
だから、まだ馴染も重ならないのに、のつけから岡  
惚れした。

「お誓さん。」

「誓ちゃん。」

「よう、誓の字。」

いや、何うも引手あまたで。大連が一臺づゝ、黒  
塗り眞圓な大圓卓を、ぐるりと輪形に陣取つて、清  
志公には極内だけれども、此を蛇の目の陣と稱へ、  
すきを取つて平らげること、焼山越の蟒蛇の比にあ  
らず、朝鮮蔚山の敵軍へ、大砲を打込むばかり、油  
の黒煙を立てる裡で、お誓を呼立つること、矢叫び  
に相齊しい。名を知らぬものまで、白く咲いて楚々  
とした花には騒ぐ。

巨匠きよせいしやうにして、超人てうじんと稱とへらるゝ、ある洋畫家やうくわかが、わが、名なによつて、お誓せいをひき寄せ、銃吉せんきちを傍かたはらにして、

「お誓せいさんには是非ぜひといふのだ、此この人に酌しやくをして  
おあげなさい。」

「はい。」  
「が、また娘分むすめぶんに仕立したてられても、奉公人ほうこうにんの謙讓けんじやうがあつて、出過ぎですぎた酒場バアの給仕きふじとは心得こころえが違ちがふし、おなじ勤めつとでも、藝者げいしやより一歩退いつほさがつて可憐しをらしい。

「はい、お酌しやく……」  
「感謝かんしゃします、本懐ほんくわいであります。」

景物けいぶつなしの地位ちゐぐらゐに、匂くが抜ぬけたほど、嬉うれし  
がつたうちはいゝ。

少し心安すこしこゝろやすくなると、蛇じやの目めの陣ぢんに恐おそれをなし、山やまの  
端はの霧きりに落おちて行ゆく――上藤じやうとうのやうな優姿やすすがたに、  
野聾のこゑを放はなつて、

「お誓せいさん、お誓せいさん。姉ねえさん、姐あねご、大姐おほあねご。」

立てごかしに、手繰りよせると、酔った赤づらの  
目が、とろんこで、

「お酌を頼む。是非一つ。」

このねだりものゝ<sup>わるざる</sup>二<sup>まかい</sup>猴、魔界の艶夫人に、芭蕉扇  
を、貸さずば、奪はむ、とする擬勢を顯はす・・・  
・博識にしてお心得のある方々は、この趣を、希  
臘、羅馬の神話、印度の譬諭經にでもお求めありた  
い。こゝでは手近な繪本西遊記で埒をあける。が、  
たゞ先哲、孫呉空は、<sup>ごまむし</sup>二<sup>へん</sup>螟蟲と變じて、夫人の腹中  
に飛び込んで、痛快に其の臟腑を抉るのである。末  
法の凡伴は、咽喉までも行かない、唇に觸れたら酸  
漿の核ともならず、溶けた了はう。

次手に、をかした話がある。六七人と銚吉此の近  
所の名代の天麩羅で、したゝかに食ひ且つ飲んで、  
腹こなしに、ぞろ／＼と歩行出して、つい梅水の長  
く續いた黒堀に通りがゝつた。

盛り場でも燈を沈め、堀の中は植込で森と暗い。  
處で、相談を掛けて見たとか、掛けて見るまでもな



かつたとかいふ。．．．．天麩羅のあとで、ヒレの大切れのすき焼は、なか／＼、幕下でも、前頭でも、番附か逸話に名の出るほどの人物でなくてはあしらひ兼ねる。素通りをすることになった。遺憾さに、内は廣し、座敷は多し、程は遠い．．．．

「お誓さん。」

黒塀を　　―　　惚れた女に洋杖は當てられない  
―　斜に、トンと腕で當てた。當てると、其の  
まくれた二の腕に、お誓の膚が透通つて、眞白に見  
えたといふのである。

銚吉の馬鹿を表はすより、これには、お誓の容色の趣を偲ばせるものがあるであらう。

雑と、恚くの次第であつた處　　―　　好事魔多し  
といふではなけれど、右のニ猴は、心さわがしく、  
性急だから、人さきに會に出掛けて、ひとつ蛇の目  
を取巻くのに、度かさなるに従つて、自然とおなじ  
顔が集るが、星座の此の分野に當つては、すなはち  
夜這星が眞先に出向いて、何處の會でも、大抵點燈

頃が寸法であるのに、いつも暮まへ早くから大廣間の天井下に、一つ光つて……いや、光らずに、ぼつんと黒く、流れて居る。

勿論、此處へお誓が、天女の装で、雲に白足袋で出て来るやうな待遇では決してない。

其の愚劣さを憐んで、此の分野の客星たちは、他より早く、輝いて顯はれる。輝くばかりで、やがて他の大一座が酒池肉林となつても、こゝばかりは、疊に蕨が生えさうに見える。通りかゝつた女中に催促すると、は、とばかりで、それ切、寄りつかぬ。中でも活撥なのは、お誓さんでなくつてはねえ、ピーと外れて了ふ。また其のお誓はお誓で、先づ、ほか／＼へ皿小鉢、銚子を運ぶと、お門が違ひませう。で、知りませんと、鼻をつまらせ加減に、含羞んで、つい、と退くが、其のまゝでは夜這星の方へ來憎くなつて、何處へか隠れる。ついお銚子が遅くなつて、巻煙草の吸殻ばかりが堆い。

何となく、ために氣がとがめて、といふのが、會

が月の末に當るので、懷中勘定によつたかも分らぬ。  
一度、二度と間を置くうち、去年七月の末から、梅  
水が……。これも近頃各所で行はれる……。  
近くは鎌倉、熱海。また輕井澤などへ夏季の出店を  
する。いや何處も不景氣で、大したほちにはならな  
いさうだけれど、差引一ぱいに行けば、家族が、一  
夏避暑をする儲けがある。梅水は富士の裾野。――  
御殿場へ出張した。

其處へ、お誓が手傳ひに出向いたと聞いて、がつ  
かりして、峰は白雪、麓は霞だらう、と其のまゝ夜  
這星の流れで消えたのが――もう一度いはう  
―― 去年の七月の末頃であつた。

この、六月――いまに至るまで、それ切り、  
その消息を知らなかつたのである。

もし梅水の出店をしたのが、近い處は、房總地方、  
或は其の輕井澤、日光――鹽原ならばいふまで  
もない。地の利によらないことは、それが木曾路で  
も、ふとすると、こんな處で、何うした拍子、何か

の縁で、おなじ人に、逢ふまじきものでもない、と思つたらう。

佛蘭西の港で顔を見たより、瑞西の山で出會つたのより、思掛けなさはあまりであつたが——こゝに古寺の觀世音の前に、紅白の絹に添へた扇子の名は、築地の黒堀を隔てた時のやうではない。まのあたり其の人に逢つたやうで、單衣の袖も寒いほど、しみ／＼と、熟と視た。

忽ち、炬の如く燃ゆる、おもほてりを激しく感じた。爺さんが、庫裡から取つて來た、燈明の火が、ちら／＼と、

「やあ、見るもんぢやねえ。」  
その、扇子を引つたくと、  
「あなたよ、こんなものを置いとくだ。」  
と叱るやうにいつて、開いたまゝ、その薄色の扇子で、木魚を伏せた。

極りも悪いし、叱られたわんぱくが、ふてたやう

に、故とらしく祝していった。

「上へのつけられたより、扇で木魚を伏せた方が、  
女が勝つたやうで嬉しいよ。」

「勝つも負けるも、女は受身だ。隠すにも隠され  
ましねえ。」

どかりと尻をつくと、鼻をすゝつて、しく／＼と  
泣出した。

青い煙の細くなびく、蠟燭の香の沁む裡に、さつ  
きから打ちかさねて、ものゝ様子が、思はぬかくし  
事に懐妊したか、また産後か、おせい、といふうつ  
くしい女一人、はかなくなつたか、煩らうて死なう  
とするか、そのいづれか、とフト胸がせまつて、涙  
ぐんだ目を、忽ち血の電光の如く射たのは、林間の  
自動車に闖入した、五體個々にして、然も畝り繋つ  
た赤色の夜叉である。渠等こそ、山を貫き、谷を穿  
つて、うつくしい犠牲を獵るらむ。飛天の銃は、あ  
の、清く美しい白鷺を狙ふらしく想はるゝとともに、  
激毒を啣んだ靈鳥は、渠等に對して如何なる防禦を  
するであらう、神話の如き戦は、今日の中にも開か

るゝであらう。明神みやうじんの晴はれたる森もりは、忽たちまち黒雲くろくもに蔽おほはるゝであらうも知しれない。

銚吉せんきちは、少すくなからず、獵奇れふきの心こころに驅かられたのである。

同時どうじにお誓せいがうつくしき鳥とりと、おなじ境遇きやうぐいに置おか  
るゝものゝやうに、衝つと胸むねを打うたれて、ぞつとした。  
その時とき、小枝こえだが揺ゆれて、卵うの花はなが、しろ／＼と、  
細ほそく白しろい手てのやうに、銚吉せんきちの膝ひざに縋すがつた。

【完】